

仮面ライダーウィザード 【異世界奮闘記】

黒煙龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファンタム・オーガとの戦闘から半年後。

突如、真由・譲・昌宏の魔力が奪われるという事件が発生。

仮面ライダーウイザードこと操真晴人は漆黒のローブに身を包む謎の男に遭遇する。
謎の男の目的は？

晴人は三人の魔力を取り戻す事が出来るのか？

そして、物語の舞台は日本を離れ……。

晴人は異世界でファンタムの陰謀に巻き込まれていく。

目

次

第一話
第二話
第三話

76 38 1

第一話

青年・操真晴人は、建物の階段を駆け上がっていた。息を切らして、階段の踊り場で立ち止まる。

「はあ…はあ…この展開、前にもあつたな…」

晴人はまだコヨミが居た頃…金色の魔法使いによつてコヨミが拐われた時の事を思い出していた。

「ちつ…急がないと!」

晴人は再び階段を駆け上がつた。

その頃、その建物の屋上では、全身を漆黒のロープに身を包んだ謎の人物が立つてい
た。

「ふつ…目的のモノは手に入つた」

漆黒のローブを纏つた人物は、声からして男のようだ。

「この世界にもう用は無い…」

そう言つて手を前に翳す。すると、男の目の前に、虹色に輝く魔方陣が現れた。

男は、ゆっくりとした足取りでその魔方陣に近づく。とその時、晴人が屋上に到着した。

「待て！」

「追い掛けて来たか、指輪の魔法使い」

「お前：それを何に使うつもりだ!?」

「貴様に教える必要は無い」

「そつか。でも持つてかれると困るんだ。力づくでも返してもらう」

晴人は、右手の中指に嵌められた「手」の意匠が施された指輪を、同じく「手」の意

匠が施されたベルトのバックル部分に翳す。

『ドライブオーン、プリーズ』

音声コールと共に晴人の腰にウイザードライバーが出現した。
そして、力強く叫ぶ。

「変身!!」

叫ぶと同時に右側に傾いているハンドオーサーを左側に傾ける。

そして、既に左手の中指に嵌めていた、赤い魔宝石から削り出された指輪を翳した。

『フレイム！ プリーズ』

ベルトから音声コールが流れる。

同時に指輪が輝きを放ち、燃える様な赤い魔方陣を出現させた。

『ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！』

晴人は、ちょうど男との間に出現した魔方陣を走つて通過する。

魔方陣を通過した晴人の姿は、人間のそれとは明らかに違つた。

指輪と同じルビーを模した赤いマスク。その身を包む黒の魔法衣・ウイザードロー
ブ。丸い形状の頭部・ベゼルフレイム。

燃える炎のエレメントをその身に宿す基本形態^{フレイムスタイル}の指輪の魔法使い。
またの名を「仮面ライダーウィザード」。

変身した晴人：もといウイザードは、男に対して蹴り等の物理攻撃を繰り出す。アク
ロバティックで舞う様な動きだ。

しかし、全て攻撃が防御されるか躱されるかしていた。

「生身の人間に對して、変身して襲い掛かるのが貴様の流儀か？」

「生身の人間？　冗談でしょ。地上からこの屋上まで一気にジャンプしたくせに！」

「鍛えているものでね。あのくらい朝飯前だ」

会話しながらも攻撃の手を緩める事の無いウイザード。

男も、このままでは埒が明かないと思ったのか、防御から一転、攻勢に移つた。
お互に一步も引かない中、ウイザードは右手の指輪を取り替え、ベルトのシフトレー
バーを操作しハンドオーサーを右側に傾ける。

『コネクト、プリーズ』

音声コールと共に出現した赤い魔方陣から、ウイザードはソードモードのウイザード
ソードガンを取り出した。

「武器とは…あまり公平とは言えないな」

「あんまり余裕が無いものでね。アンタを倒して、真由ちゃん達の魔力を取り戻さない
と…」

「貴様とは違つて、彼女達は魔力を有効に使えない。我輩が使つてやつた方が、有効的
だ」

「魔力を使う？ アンタ、一体何者だ。その魔力で何する気だ!?」「すぐに消える貴様に、答える意味など無い！」

男はそう言つて右手を前に突き出した。

次の瞬間、ウイザードは衝撃によつて吹き飛ばされる。

「があああああ!?」

「ウイザード：お前にはここで消えてもらう」

再び突き出した右手から先程よりも強力な衝撃波が放たれる。

ウイザードは素早く右手の指輪を交換すると、ハンドオーサーを素早く右側に傾け直し、再びベルトに翳した。

『デイフェンド！ プリーズ』

出現した赤い魔方陣が盾の役割を果たし、衝撃波からウイザードを守る。が、衝撃波の威力が大きすぎた。

魔方陣ごと勢い良く後ろに吹き飛ばされたウイザードは、背後の壁に全身を強打した。

「がはあ！」

「無様だなウイザード。このまま消えるが良い」

その言葉と共に男の右手がその輝きを増した。
だが、その輝きが次第に小さなものになっていく。

「おや？ もう時間か。どうやら命拾いしたなウイザード。あばよ」

男はそのまま踵を返し、初めに出現させていた虹色に輝く魔方陣に向かつて歩き出す。

「ま…待てよ！ どこに行くつもりだ！」

必死に身体を起こそうとするウイザード。しかし、謎の人物は、その努力虚しく虹色

の魔方陣に消えた。

薄れゆく意識の中で、ウイザードが最後に見たのは、漆黒のローブに身を包んだ男の恐ろしいまでに冷酷な目だつた。

晴人は身体に走る痛みと共に目を覚ました。

いつの間にか、ウイザードの変身は解け、本来の晴人の姿に戻っていた。
辺りを見渡すが、当然漆黒のローブを纏つた人物は居ない。

「まさか…また世界が作り変わったとか言わないよな…」

晴人は苦笑いを浮かべると、ゆっくりと立ち上がった。

同時に再び身体中に痛みが走る。

「いっつ！」

晴人は反射的に脇腹を押さえて蹲る。

ようやく痛みが引いたのか、再びゆっくりと立ち上がった。

「……なるほど。世界が作り変わったわけでは無いみたいだな」

いつもと変わらない街並みを眺め、安堵の表情を浮かべる晴人。

一息つくと、晴人はポケットから携帯を取り出しどこかに電話をかけた。

「あ…凜子ちゃん？ 悪い、逃げられた」

『晴人くん、今どこ？』

「どつかのビルの屋上」

『無事で良かつた。すぐに病院に来て！』

「え？ いや、俺は大丈夫だけど…」

『晴人くんじやなくて、真由ちゃん達が意識不明なの！ とにかく、すぐに来て！』

その言葉を最後に電話は切れた。

晴人は携帯をポケットに仕舞うと、屋上から下に降りた。

地上に戻った晴人は、右手の指輪を変更してベルトに翳す。

『コネクト、プリーズ』

赤い魔方陣から【マシンウインガ】を取り出し、跨がる晴人。

晴人は、先ほどまで居た屋上をチラリと見ると、そのまま走り出した。目的地：病院

に向かつて…。

バイクを走らせてから十分。晴人は真由や譲、昌宏が入院している病院に到着した。病院の入口には、凜子が待っていた。

「晴人くんこつち」

バイクから降りた晴人を凜子が手招きする。

待合室を通り抜け、階段を上がり、やがて集団病室にたどり着いた。

「ここに、真由ちゃんと譲くん、山本さんが入院してるわ。みんな意識と魔力を失つてる」

「やつぱり、俺と戦ったあの漆黒のロープ野郎が…」
「うん」

病室に入つた二人は、並んだ三つのベッドに横たわる三人を見ながら話す。
その時、廊下を乱暴に走る足音が近づいてきた。

「おいつ！ 謙が襲われたつてホントか!?」

「ちよつ仁藤くん、声が大きい！」

「仁藤？ お前今まで何やつてたんだ？」

「それより凛子ちゃん！ 謙は誰に襲われたんだ!?」

突然病室に現れた青年・仁藤攻介が荒々しい口調で捲し立てる。

「落ち着け仁藤。襲撃犯はもう……」

晴人は一拍置いてから仁藤に事情を説明した。

「晴人が取り逃がすつて事は相当デキる奴だな。何てつたつて晴人はこの俺のライバルだからな！」

「仁藤……」

「それよりも晴人。どうにかしてそいつを追わねえと、譲たちが目を覚まさねえ」
「ああ、そうだな」

晴人と仁藤はお互に決意を新たにした。

病院から出た晴人は、仁藤と共に近くの公園のベンチに腰かける。

凛子は三人に付き添っているため、病院に残してきた。

ベンチに座り、膝の上で手を組みながら仁藤が口を開いた。

「その……【漆黒の男】は何が目的で真由ちゃん達を襲つたんだ？」

「解らない。でも、奪つた魔力を何かヤバい事に使うのは確かだ」

「だが、わっかんねー！ 何で晴人の魔力は狙わなかつたんだ？」

「こう言つちや何だが、晴人の魔力が一番強い。魔力使つて何かやるなら、それが一番確実だろ？」

仁藤の疑問ももつともだ。

事実、晴人の魔力はこの中の誰よりも強かつた。

仁藤の疑問に晴人が口を開きかけたその時、突如横から声が掛けられた。

「それはね、ウイザードにはまだ利用価値があるからだよん♪ 疑問は解決したかな、ビーストちゃん？」

突如聞こえてきた声に、晴人と仁藤は素早く反応する。

そこには、深紅のローブに身を包んだ幼女しゃくがんが仁王立ちしていた。

ローブと同じ色の髪、そして輝く灼眼しゃくがん。見た目は八歳の幼女。だが、幼女の出す雰囲気が、ただ者ではないと感じさせる。

「何者だテメー。譲襲った奴の仲間か？」

「私？ 私は s 「今まで言うな……え？」

「テメーが何者だろうと関係ねえ。ここで倒すんだからな！」

仁藤はそう言うと、右手をベルトに翳した。

『ドライバー、オン!』

すると、音声と共に晴人のとはまた違った形のベルトが現れた。

「変――――身!!」

仁藤は、左手にライオンを模した指輪を嵌めると、独特のポーズを取つてベルトに指輪を嵌め込み、そのまま捻つた。

『セット、オーブン!』

同時にベルトが開き、魔方陣が飛び出す。

『L・I・O・N、ライオン!』

魔方陣が仁藤の身体を通過した後、その場には古の魔法使いが堂々と立っていた。

「ランチタイムだ！　あ、でもファントムじやねーから喰えねえか！」

仁藤：もとい仮面ライダービーストは、専用武器のダイスサーベルを取り出す。そして単身、深紅の幼女に突撃していった。

「おい仁藤！　待てこのマヨネーズ！」

晴人を置いて単身で突撃した仁藤を見て、晴人はそう叫び右手をベルトに翳した。

『ドライブーオン、プリーズ』

そしてシフトレバーを操作し、右側に傾いていたハンドオーサーを左側に傾けた。

『シャバドウビタツチヘーンシーン！　シャバドウビタツチヘーンシーン！……』

直後、ベルトから軽快な音声コールが流れ始める。

それはおよそ場違いなメロディだつた。

「変身…」

晴人はそう言つて、既に左手に嵌まつていた【フレイムウイザードリング】の目の部分を右手で下ろす。

そしてゆっくりとベルトに翳した。

『フレイム！ プリーズ』

音声コールと共に、晴人は左手を身体の左側に突き出す。

その先に、燃えるような赤い魔方陣が出現した。

『ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！』

出現した魔方陣がゆっくりと移動し、晴人の身体を通過する。

魔方陣が通過した後には、仮面ライダーウィザードが堂々と立つていた。

「さあ、ショータイムだ」

「ウイザードは左手を顔の横に構え、ビーストに続きその戦いのゴングを鳴らす言葉を言い放つた。

ビーストに続きウイザードも参戦したこの状況でも、深紅の幼女は冷静だつた。

「二対一はちよーっとズルくなあい、ビーストちゃん?」

「気持ち悪い呼び方すんな!」

ビーストはそう言つて右手の指輪を牛の様な紋章が刻まれていてる指輪に変更する。そして、ベルトの右側に嵌め込んだ。

『バツファ！ ゴー！』

右側に突き出した指輪から、赤い魔方陣が出現する。

『バ、バ、ババババツファ！』

音声と共に、魔方陣がビーストの身体を通過した。

同時に、ビーストの右肩からバツファロードの力を宿した茶色のマントが垂れる。バツファウイザードリングを使用することで、自身のパワーを上げたのだ。

ビーストは深紅の幼女に強力な突進をかます。

「きやつ！　ちよつと、痛いんですけどお！」

堪らず悲鳴を上げる深紅の幼女。

その様子を横目で見ていたウイザードも、ビーストに負けじとウイザードガン・ソードモードで深紅の幼女を斬りつけた。

力任せの荒々しい攻撃をするビーストとは対照的に、ウイザードは流れる様に美しい剣捌きでジリジリと幼女を追い詰める。

二人の動きは、一見バラバラに見えるが、ちゃんと息は合っていた。

「うん、やっぱり強いにやあ」

「テメーなめてんのか？ 何で避けてばつかで反撃しねーんだ！」

「私は平和主義者なんだよう！」

「つーか、譲たち襲つた理由は何だ！ 魔力使つて何するつもりだ!?」

皆まで聞いてや

「から答えろ！」

「えー？ ヤダ♪」

次の瞬間、幼女が纏つている雰囲気が強烈な殺気に変化した。

「おいヤベーぞ、晴人」

「ああ。雰囲気が変わった」

「えい！ みんな燃えちゃえ♪」

直後、深紅の幼女が前に突き出した右手から、火炎弾が放たれる。

「ぐはつ！」
「がはあ！」

ウイザードとビーストは火炎弾をまともに受けて吹き飛んだ。

「あはは♪ 良い感じだね♪」

「く：氣味の悪い奴だ」

ウイザードはそうボヤいて左手の指輪を、霁を模した青い指輪に変更し、シフトレー
バーを操作して再度左側に傾けたハンドオーサーに翳した。

『ウォーター！ プリーズ』

『スイー、スイー、スイスイー！』

手を上に翳す。そこから出現したのは、流動的に逆巻く青の魔方陣。

ゆつくりと、だが確実に魔方陣はウイザードの身体を通過する。

通過し終えた時、その場に立っていたのは赤い基本形態ではなく、フレームスタイル 流れる水のエレメ

ントをその身に宿す青い特殊形態だった。

霁をイメージさせるひし形に近い形状の頭部・ベゼルウォーター、水を操る事が可能
で、通常スタイルの中でも魔力に優れる形態である。

「へえ。火には水が有効だもんね♪」

「仁藤、こいつ何かヤバい。とつと片付けるぞ！」

ウイザードはそう叫ぶと、ウイザードガンのハンドオーサーを起動する。

『キヤモナ・スラツシユ・シェイクハンズ！ キヤモナ・スラツシユ・シェイクハンズ！……』

待機音声が流れる中、ウイザードは左手を握手する様にハンドオーサーに翳した。

『ウォーターリード！ スラツシユストライク！』

『スイ、スイ、スイ！ スイ、スイ、スイ！……』

音声コールと共に、ウイザードガンが水流を纏う。

そして、そのまま深紅の幼女に向けて水流の斬撃が放たれた。
同時にビーストも行動する。自身が持っているダイスサーベルのダイスを回転させ、

左手の指輪を横にある窪みに嵌め込んだ。

『フオー！』

『バツファ！ セイバーストライク！』

ダイスは4で止まり、音声コールが流れる。

「よっしゃ、行くぜ！」

勢い良く振るつたダイスサーベルの前方に魔方陣が出現し、そこからバツファローの形を取つた魔力の塊が四体飛び出す。

その魔力の塊は、寸分の狂いも無く、ウイザードの放つた水流の斬撃と共に深紅の幼女に直撃した。

激しい爆発音と共に辺りに砂塵が舞う。

しかし、砂塵が晴れた時、その場には無傷の幼女がにこやかに立つていたのだつた。

「まさか、もう終わりなんて言わないよね♪ 私、まだまだ遊び足りないよん♪」

「く…なんて奴だ！」

「ウイザードもビーストちゃんももつと本気だしてよ！ まだまだ上があるでしょ♪
もつと私を楽しませて？」

「余裕見せやがって。こうなつたら！」

ビーストは派手な装飾のされた指輪を右手に嵌めてベルトに差し込もうとした。
しかし、突如巻き起こつた突風により、吹き飛ばされてしまう。

同時に、ビーストの身体から火花が飛び散り、ビーストは変身が強制解除されてしまつた。

「ぐがあ！」

「仁藤！」

「ぶううううう！ 何で邪魔するのさ!?」

その姿に合わせるかのように口を尖らせて文句を言う深紅の幼女。

幼女の反応を嘲笑うかのように、ビーストを吹き飛ばした突風は集束していき、人間の姿を形成していく。

薄い緑色の腰まで垂れた長い髪。翡翠の瞳はまっすぐにウイザードを捉えている。年功は二十代前半だろう。幼女と同じ様に深緑のローブに身を包んでいる。さらに、特筆すべきはそのはち切れんばかりに己を主張する胸だ。もう爆乳である。そんな深緑の爆乳女に、深紅の幼女が怒りを露にして捲し立てた。

「もう！　何で邪魔するのヒュウカ！？」

遊んでるんだから手出ししないでって言つたよね！」

「遊び過ぎよメラ。そろそろ戻らないと主にまた怒られますわよ？」

「ぶううう。まだ遊び足りないもん！」

幼女がそう言つた瞬間、突風が吹いたかと思つたら幼女が風で拘束されていた。

「放してよう、このウシチチ女！」

「あらあら、嫉妬は見苦しいわよメラ。同い年のよしみであまり触れないでおいてあげてるのに♪」

「うわああああああん！　気にしてるのにい！」

地団駄を踏む幼女に對して、涼しい顔をしている爆乳女。
しばらくそんなやり取りが続いていたが、やがて爆乳女…もといヒュウカがウイザードに語りかける。

「ウイザード。私たちはあなた方と事を荒立てるつもりはありません。頂いた魔力は、計画が完了すればお返しします。どうか、見逃しては頂けないでしようか？」
「手を引けって？　冗談でしょ」
「そうですか、残念です」

心底殘念そうに溜め息をつき、ヒュウカは右手を一回祓つた。
突如吹き荒れる突風。ウイザードはその突風に捉えられ、身体から火花を出しながら吹き飛ばされる。

地面を転がり、強制的に変身が解除されてしまった。

「ではまたいつか。次にお会いできる日を楽しみにしてますわ♪」

ヒュウカは、依然のして空中で暴れているメラを引き連れて、虹色の光と共に姿を消

した。

それから数日間は、何事もなく平和に過ぎていった。

真由・譲・昌宏の三人は、未だに意識不明で入院中だ。

捜査も進展せず、行き詰まつてゐる状況だつた。

そんな中、晴人は国安0課の木崎警視に呼ばれ、0課の本部に來ていた。

「…來たか操真晴人。早速だがこれを見ろ」

そう言ふと、木崎はノートパソコンの画面ディスプレイを晴人に見せた。

「…これは？」

「笛木奏が生前研究していた資料だ。殆どが娘・暦を甦らせる為の研究だが、ひとつだけ全く異なる研究があつた」

「異次元の扉と平行世界に関する考察」…これが笛木の研究？ 一体どんな研究なんだ

?

「さあな。そこまでは判らん。だか、今回の事件に関わってる事は確かだ」

木崎はそう言つて画面をスクロールする。そして、ある地点で止めて、晴人に見る様に促した。

「……『魔法使いの魔力によつて、別次元への扉が開くようだ。どれだけの魔力が必要かはランダムらしい。残念だが、私の魔力は使えない。他に魔法使いが居れば可能か?』
…何だこれ?」

「要約すると、魔法使いの魔力によつて、異次元への扉を開いて異世界に行く事が出来るらしい。奴等はその為に稻森真由たちから魔力を奪つたと考えるのが妥当だ」

木崎は自分の推理を述べる。その推理は的を射たものだつた。
とその時、虹色の光が部屋の中に射し込んで來た。

その光は、晴人には見覚えがあつた。

「この光…まさか!」

晴人は嫌な予感がし、木崎の制止を振り切つて部屋を飛び出した。外に出た晴人は、虹色の光が激しい場所に向かつて走る。

その表情には、覚悟の色が浮かんでいた。

時間は少し戻り、五分前。周りに人気のない広場に深紅の幼女、漆黒の男、深緑の爆乳が立つていた。

その他にも三人居る。それぞれ、茶色のローブ、黄色のローブ、水色のローブを着ている。

「いよいよだな…」

漆黒の男がそう呟く。その呟きに深紅の幼女・メラが反応した。

「邪魔が入らなければ、もつと早く目的を達成できたのに。ダクがしくじるからあ～」「我輩は別にしくじっていない！ 勝手に奴が邪魔してきたのだ！」

「そこまでにしどき！ 嘘嘩両成敗やで！」

漆黒の男・ダクと深紅の幼女・メラが言い争いを始めた瞬間、黄色のローブを着た少女が止めに入った。

「む～。でも、確かにサンの言う通りだね～」

「そうだな。ここは、我等の目的を速やかに遂行せねばなるまい」

ダクはそう言うと、懷から小瓶を三個取り出した。

その小瓶には、それぞれ橙、青、緑の光で満ちている。

「それが例の魔法使い達から奪った魔力かい？」
「意外にキレイやね！」

茶色のローブを着た青年がダクに訊ね、サンと呼ばれた黄色のローブを着た少女は、眼を輝かせて感想を述べる。

「そうだ。ほれ」

ダクは橙の小瓶をヒュウカに、青の小瓶を茶色のローブを着た青年に手渡し、緑の小瓶は自分の手に納める。

「さあ、始めよう」

ダクはそう言って緑の小瓶を上空に放り投げる。

他の二人もダクに倣つてそれぞれの小瓶を放り投げた。
次の瞬間、激しい虹色の光が辺りを包む。見ると、丁度三人の中心に虹色の光を放つ巨大な穴が、上空にポツカリと空いていた。

「行け！ じきにこの扉は閉じる。それまでに次元を渡るのだ！」

ダクの叫びにメラと【水色のローブ】が穴に飛び込む。

それに続き、ヒュウカとサンも飛び込んだ。

「さあ、ラド！ 後は貴様だ、早く飛び込め！」

「ダメだよダク！ 指輪の魔法使いがこっちに来た。誰かが足止めしないと！」

ダクはラドの指差す方向を見る。そこには、こちらに向かつて全力で走っている晴人の姿があつた。

その指には、派手な装飾が施された赤い指輪を嵌めていた。

「変身つ！」

『フレイム！ ドラゴン！』

『ボー、ボー、ボーボー！』

音声コールと共に、赤い魔方陣を潜る晴人。

魔方陣を潜ると同時に、炎のエレメントを纏つたウイザードラゴンの幻影が数回晴人の周りを旋回し、晴人と一体化する。

最後に、ウイザードラゴンの咆哮と共に晴人の姿が変わった。

長く伸びた頭部のエクスドラゴロッド。丸い形状のアルターベゼルフレイム。両肩には丸い封印石・グランマジエステイが追加されている。

深紅のウイザードローブはその身に宿すエレメントと同じだ。

その胸部には、ウイザードラゴンの顔を模した装甲・スカルキュイラスが施されている。

仮面ライダーウィザード、フレイムスタイル基本形態の強化形態。フレイムドラゴン炎を司る魔法使いの真の姿だった。

「ラド！ 奴は我輩が相手をする！ 貴様は扉に入れ！」

「それこそダメだよ！ キミはこれまでの行動で力を浪費している。万全な僕が相手をするべきだ！」

「しかし……この扉は間もなく閉じるぞ！」

「だつたら尚更だよ！ 早く行つて！」

ラドは躊躇つて いるダクを虹色の穴に突き飛ばした。

「ラドおおおおおおおおおおおお!!!」

ダクの叫びは、虹色の穴に消えていった。

その声を背中に浴びながら、ラドはウイザードと向き合う。

「時間が無いんだ。退いてくれないかな?」

「時間が無いのはこつちも同じだ! 退くわけにはいかない」

ウイザードの言葉にラドは小さく舌打ちすると、右腕を岩石に変化させて殴りかかつた。

その一撃を紙一重で躱すウイザード。

「強化形態は伊達ではないみたいだね」「悪いがそう言う事だ。逃がしはしないぞ」

「ウイザードは素早く右手の指輪を交換する。そして、右側に傾けたバンドオーサーに翳した。

『エキサイト、プリーズ』

右腕のみ赤い魔方陣を潜らせるウイザード。魔方陣を潜った右腕は、物凄い筋肉に覆われていた。

「え？ ちよつ…それはズルくない!?」

ムキムキになつたウイザードの右腕を必死に躱すラド。

そうこうしている間に、確実に虹色の穴は小さくなつていつた。

「く…次元の扉が閉じる」

悔しそうな表情でウイザード攻撃をいなすラド。だが、次第に追い詰められていく

「フィナーレだ！」

ウイザードは右手の指輪を、深紅の魔宝石が嵌め込まれた【スペシャルウイザードリング】に変更し、ベルトに翳そうとした。

しかしその時、お互に予想していなかつた出来事が起きた。

小さくなつていた虹色の穴が、突如再び拡張し、周囲を勢い良く吸い始めたのだ。

「何!?」

「扉に吸い込まれる。これで、帰れる！」

笑みを浮かべるラドとは対称的に、ウイザードは何が起きているのか全く把握できていなかつた。

解つてているのは、自分がとてつもない事に巻き込まれている事と、虹色の穴・次元の扉に吸い込まれているという事実だけだつた。

(
続
く
…)

第二話

「うわああああああああああ!!!」

次元の扉に吸い込まれた晴人は、現在自由落下に似た体験をしていた。扉に吸い込まれた直後に変身が強制解除された為、今は晴人の姿で落下中だ。

この空間は特殊なもので、魔法がキヤンセルされるらしい。その証拠に、先ほどからベルトからはエラーコールが発声されている。

しばらく落下していると、虹色の光の奔流が晴人を包んだ。

晴人の意識はそこで途絶えてしまった。

一体どれくらい眠つていただろう…。晴人は身体に当たる水の感触に眼を覚ました。

「……砂浜?」

リズム良く当たっている水は、波だつたのだとこの時初めて気づく。

「確か俺は：次元の扉に吸い込まれて…」

僅かずつだが、記憶が蘇ってきた。

「そうだ、あいつは!?」

吸い込まれる直前まで戦っていた青年の事を思い出す。茶色いローブを着た【ラド】と呼ばれていた青年。

敵ではあつたが、どこか憎めない青年…。その姿は周囲には無い。

「つてか、ここどこだ？ 携帯は圈外だし…」

自分の携帯に表示される【圈外】の文字。晴人は自身が置かれている状況を察し、溜め息をついた。

「……ホントに世界を渡つたみたいだな」

その咳きに答えてくれる者は誰も居ない。晴人は、とりあえずその場から移動する事にした。

『コネクト、プリーズ』

赤い魔方陣から愛車のバイクマシン・ヴァンガードを取り出す晴人。その表情には安堵の色が浮かんでいた。

「良かつた。魔法は使える」

晴人は一息つくと、バイクに跨がつて先に進み始めた。

しばらく走ると、周囲の景色に変化が起ころる。先ほどとは異なり、小さい木々や茂み等が目立ち始めたのだ。潮の香りももうしない。

しかし、晴人にとってそんなことはどうでも良かった。晴人は、今世紀最大のピンチ

に陥っていたのだ。

「…………どこだっこ？」

迷つたのである。何せ右も左も解らない異世界なのだ。迷うのは当然といえる。晴人はバイクを止めると、右手の指輪を交換しベルトに翳した。

『ガルーダ、プリーズ』

晴人は使い魔を召喚し、人が居そうな場所の捜索を頼む。

「……とりあえず人を探してくれ。これじゃあマトモに動けない」

晴人の言葉に、ガルーダは頷くとすぐに飛び立つていった。

ふう、と一息ついた晴人は、【コネクトウイザードリング】を使用して、ハングリーのドーナツ（プレーンシユガー）を取り出し、近くの岩に腰かける。

「やっぱコレでしょ♪」

美味そうにドーナツをかじる晴人。いつもならここで何かしらの邪魔が入るのだが、今回は心配ないようだつた。

と安堵していたのも束の間、背後から低い唸り声が聞こえてきて、思わずヒヤリとした。

振り返ると、紅蓮の毛並みをもつ狼に似た動物がヨダレを垂らしてこちらを見ていた。
「でかつ!?」

晴人は、その狼の大きさに目を見開いた。少なく見積もつても、体長三メートルはある。

狼の目は、完全に晴人をロツクオンしていた。

苦笑いを浮かべながらゆっくりと立ち上がる晴人。そして、狼を刺激しないように、ゆっくり後退りを始めた。

だがその努力虚しく、狼は晴人を食べようとその大きな口を開けて突っ込んで来る。

あまりにも咄嗟の事で、晴人は反応出来なかつた。

晴人は、この後起こるであろう結果を覚悟し目を閉じた。

「らしくない」：晴人はそう思つた。だが、いつまで経つても何の衝撃も来ない。不思議に思つて目を開けた晴人は、驚くべき光景を目の当たりにした。

「よう、無事か青年？」

そこには、巨大なメイスで紅蓮の狼の押さえつける少女の姿があつた。流れる様な腰まで伸びた青髪。褐色の肌は、必要最低限の箇所を除いて限界まで露出している。

出る所は出ていて、引き締まるべき箇所はちゃんと引き締まつてゐる。所謂、ボン・キユツ・ボンの体型だつた。

少女は、晴人を見て声高らかに宣言する。

「青年、手を貸してやるぜ！」

「えつと…キミは誰？」

「おつと…詳しい話は後だ。まずはこの紅蓮狼クリムゾンウルフを倒すのが先だ！」

少女はそう言うが早いか紅蓮狼をメイスで殴り飛ばす。

「すっげえ怪力…」

「何か言つたか？」

晴人の咳き声が聞こえたらしく、ギロリと睨む少女。どうやら性格はかなり攻撃的なようだ。

殴り飛ばされた紅蓮狼は、体勢を低くして飛び掛かる準備をしている。完全に攻撃体制だつた。

「仕方ない」

『ドライバー オン、プリーズ』

溜め息をついて晴人はベルトを出現させる。

『シャバドウビタツチヘーンシーン！ シャバドウビタツチヘーンシーン！……』

軽快に流れる待機音声。それを聞いた少女は、あからさまに顔をしかめた。

「喧やかましつ！ 何だソレ?!」

「変身！」

『フレイム！ プリーズ』

『ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！』

基本形態フレイムスタイル変身した晴人を見て口笛を吹く少女。

「すげえなソレ。魔武装か？」

「魔武装？ 何ソレ…」

「属性を自分の身体に纏わせて強化する技さ。でも、基本魔武装は姿変わらない筈だけどなー」

そう言つて首を傾げる少女。

「ふうん。ま、魔武装ではないと思うよ。

俺はウイザード。しがない魔法使いさ！」

「魔法…使い…」

啞然とした感じで少女が呟く。

そんな少女を尻目に、晴人は【ウイザーソードガン】を取り寄せて紅蓮狼に向かつていつた。

しばらくポカンとしていた少女だつたが、すぐにウイザードに続く。

「青年！　お前、魔法使いだつたんだな！」

「まあね。ところで、後で色々聞きたい事があるんだけど…？」

ウイザードと少女は、紅蓮狼の相手をしながら会話する。

「いいぜ。何でも聞きにこい！」
「んじや、とつとと片付けるか」

「ウイザードはそう言つてウイザーソードガンをガンモードにしてハンドオーサーを起動させた。

『キヤモナ・シュー・ティング・シェイクハンズ！ キヤモナ・シュー・ティング・シェイクハンズ！……』

『フレイム！ シュー・ティングストライク！』

『ヒー、ヒー、ヒー！ ヒー、ヒー、ヒー！……』

「フィナーレだ。はあっ！」

氣合いと共に、ウイザーソードガンの銃口から炎の塊が紅蓮狼に向けて勢い良く発射された。

だが、その一撃が紅蓮狼に届く事はなかつた。紅蓮狼の手前で吸い込まれる様に消えたのだ。

「へえ、火は効かないわけか……」

「あいつは火属性の攻撃を無力化するアビリティを持つてる。火は効かねえぞ！」

「なるほど：だつたらこれだ！」

「ウイザードは右手の指輪を、青い魔宝石が嵌め込まれた派手な装飾の指輪に換えてハンドオーサーに駄替した。

『ウォーターリードラゴン！』

『ジャバジヤババシャーン、ザブンザブーン！』

青い魔方陣と共に、水のエレメントを纏つたドラゴンの幻影がウイザードと一体化する。

絶大な水の魔力が、ドラゴンの咆哮と共にウイザードの姿を変えた。

雲を模したひし形に近い形状のアルターべゼルウォーター。両肩にはひし形の封印石が追加されている。

胸部には、フレイムドラゴンと同じくウイザードラゴンの顔を模した装甲が施されていた。

その身上に宿すエレメントと同じ、澄んだ青のウイザードローブをはためかせて、
特殊形態の強化形態・水を司る魔法使いが静かに立っていた。

ウォータースタイル

ウォータードラゴン

ウォータードラゴン

「わあお。アンタ、複数の属性が使えるんだな！」

感心する少女。そんな少女を尻目に、ウイザードはウイザードガンをソードモードに変更して紅蓮狼に斬りかかる。

吹き飛ばされた紅蓮狼は、体勢を崩しながらも、その口から大きな火球を放つた。放たれた火球は、まっすぐにウイザードを狙う。

だが、ウイザードはあくまでも冷静だった。落ち着いて、右手の指輪を【ウォータードラゴンウイザードリング】と同じ魔宝石から削り出された指輪に取り替えると、ハンドオーサーに翳した。

『チョーイイネ！ ブリザード、サイコー！』

音声コールと同時に右手を前に翳す。すると、青い魔方陣が出現し、凄まじい冷気を放出し始めた。

冷気はあつという間に放たれた火球を呑み込み、一瞬で周囲を白銀に変える。いつの間にか、紅蓮狼も氷漬けになっている。

「お前、氷も操れるのか…？」

「まあね。今度こそフィナーレだ！」

ウイザードは紅蓮狼に對して悠々と宣言する。

同時に、深紅の魔宝石が嵌め込まれた指輪を右手に嵌めた。

『チヨーイイネ！　スペシャル、サイコー！』

青の魔方陣から再びドラゴンの幻影が出現し、ウイザードラゴンの体の一部をウイザードの身体に具現化させた。

ウォータードラゴンが具現化させたソレは…。

「ソレ、尻尾…か？」

少女の呟き通り、ウイザードの腰部からウイザードラゴンの尻尾・ドラゴテイルが出現していた。

「はああつ!!」

氣合いと同時にドラゴテイルを紅蓮狼に叩き付ける。
ウォータードラゴンの必殺技『ドラゴンスマッシュ』が決まり、紅蓮狼の躰が砕け散り、戦闘終了を意味する青い魔方陣と共に消滅した。

「ふい〜」

それを確認すると、ウイザードは変身を解除する。

纏っていた魔力が結晶となつて流れ落ち、元の晴人の姿に戻つた。

「それで、キミは誰？　そしてここはどこなんだ？」

「私はラン。そしてここは【ヴィガルニア】だ！」

にしても、アンタ強ーんだな！　あのBランクの紅蓮狼をあっさり倒すなんて…もしかして、余計な事しちやつたか？」

「そんなことないよ。助かつた、ありがとう」

晴人の言葉に、少女・ランは頬を赤らめる。

「詳しい話は私ん家で良いか？　ここじゃ、またさつきみたいな魔物が襲つてくるからな」

「判つた。お邪魔させてもらうよ」

「よっしゃ！　じやあ、着いてこい！」

「とその前に、知り合いを迎えに行かなきやならねえんだが、良いか？」

「もちろん」

「よし！　じやあ、出発だ！」

嬉しそうに晴人を手招きするランに、晴人もまた笑みを浮かべながら着いていった。この時、晴人はこの先に驚愕の事実が待ち受けているとは、夢にも思っていなかつた。

闇が支配する空間。その空間を照らすのは、二本の松明だけだ。
そんな薄暗い空間で、数人の男女が何やら話していた。

「――――以上が報告の全てです。奴等は次元の扉を通つて戻つて来たようですね
…」

「ふむ。こちらの準備は整つた、もう奴等は敵ではない。

問題は一緒にやつて来た指輪の魔ザイ法ワード使いだな：早急に始末せよ」

「はっ！ では、グリズリー・・・ウイザードを始末して来なさい」

その言葉の直後、背後の暗闇から大柄な体躯の大男が姿を現す。

「はい。招かれざる客の始末…我にお任せ下さい」

一礼した大男の周囲の空間が陽炎の様に歪み、一瞬で姿を変えた。

鋭い目と牙を持ち、頭部には熊の様な丸い耳がある。身体は更に巨大になっていた。
ファントム・グリズリーの本来の姿がそこにはあつた。

グリズリーは再び一礼すると、闇に姿を消した。

「……グリズリーは捨て駒だ。文句はないね、リヴィアイアサン」

グリズリーの気配が完全に無くなつた後、闇の中から声が発せられる。

「もちろんです、オロチ様。あやつには我等の悲願の礎となつてもらいましょう」

そう言つて闇の中から姿を現す女性。見た目は二十代前半で、青い髪に青い瞳をして
いる。確実に美人の部類に入る容姿だ。

「ふむ。この世界を我等ファントムの世に変える。邪魔する者は容赦するな」

「はっ！」

リヴィアイアサンと呼ばれた女性は、一礼すると闇に消えた。

「私はしばらく休む。灯りを消せ、トロール」

「ウス！」

低いしわがれ声と共に、二本の松明が消える。

「ごゆつくりお休み下せえ、オロチ様。あっしは外で見張ておりますんで」

しわがれ声はそれだけ言うと、気配を消した。後には暗闇と静寂だけが残されていた。

「はあああああ!!」

周囲が開けたサバンナの様な荒れた場所で、ウイザードに変身した晴人の声が轟いた。

現在晴人は、フレイムドラゴンとなつていて。

そして相手は、漆黒のローブに身を包む男・ダクだつた。

ランに着いていつた晴人は、知り合いとの待ち合わせ場所に到着。

そこで待つていた六人は、つい先ほどまで晴人が敵だと思っていた存在だつたのだ。すぐさま晴人は変身し、ダクとの戦闘になつた。そして今に至る訳だ。

少し離れた場所では、ラン達が二人の戦いを観戦していた。

「あ～あ、や～っぱりこうなつたかあ」

呆れたように溜め息をつくメラ。

「あの二人：何かあつたのか？」

「あの二人と言うより私たちとちょっと揉めたんです」

ランの問いにヒュウカが答える。

「まあ、ウイザードはホンマの事を知らんだけやねん。あーなるんも無理ないわな」「大体、ウイザード彼に真実を教えないダクも悪いと思うよ。最初から素直に言えば、彼ら協力してくれただろうし…」

「…同意…」

サンがウイザードに同情し、ラドがダクの文句を言う。それに水色のローブを纏った女性・アクアが同意した。

そんなやりとりを見ていたランは、ダクの不器用さに深い溜め息をついた。

一方のウイザードとダクは未だに戦闘を続けていた。

「待て待て我輩の話を聞け！　話せば判る！」

ダクは必死に敵意が無い事をアピールするが、ウイザードの攻撃は止まらない。

「この期に及んで、一体何の話をするんだ？」

「とにかく待て！ 奪った魔力ならもう返した！」

「…………何？」

その言葉にウイザードの攻撃が止まる。

ダクはホツとしたように持っていた武器を下ろした。

「実は、我輩達がこの世界に帰還する為に使用した次元の扉は、魔法使いの魔力によつて出現するのだ」

「ああ、知つてる。ある研究者の資料で見た」

ウイザードは変身を解除せずに相槌を打つた。ダクは話を続ける。

「我等は魔力を持たん、故にこうするしか無かつたのだ。

次元の扉の出現に使用した魔力は、一定時間で元に戻るのだ。おそらく、我等が魔力を奪つた魔法使い達は既に目覚めている」

「え…じゃあ、何でもつと早く言わないんだ?」

いつの間にか変身を解除した晴人がダクに訊ねる。その問いに答えたのはダクではなくメラだつた。

「それは、ウイザードを【^{こつ}ヴィガルニア】に連れて来る為だよん♪」

「俺を連れて来る為?」

「今この世界は危機に瀕してゐるんだよ。人に化ける魔物が民を虐殺してゐるよね」

「人に化ける魔物?まさか…」

晴人はそのワードに反応する。元の世界で嫌という程戦つてきた存在。自分の中にも居る存在。

それが、次元を越えた先にも存在していたとは驚きだつた。だが、不自然ではない。生来、魔力の高い人間：所謂【ゲート】が絶望した時に生まれるファンтомは、例え次元を越えていても現れる可能性はあるのだ。

もし、人に化ける魔物!!ファンтомなのだとしたら、晴人は戦う覚悟は出来てゐる。自分は、最後の希望なのだから…。

「で、我輩達はその集団と一戦交えた際にその中の一人に異次元へと飛ばされてしまつたのだ」

「なるほど」

「だからウイザードには奴等を倒す手伝いをして欲しいんだよん。頼めるかにやあ？」

メラの質問に晴人は一同を見渡す。晴人の答えは決まつていた。

「事情は解つた。俺で良かつたら協力するよ。俺は、最後の希望だから……」

晴人はそう言つて、左手を握つて前に突き出した。そこには赤く煌めく指輪が嵌まつてゐる。

その時、どこからともなく大声が響いた。

「では、その最後の希望を絶つてやろう！」

声がした方向を全員が見る。そこには、傭兵のような逞しい体をした大男が立つてい

た。

大男はゆっくりと近づいてくる。

その服装は、明らかに晴人が居た世界のそれだつた。

ゆっくりと近づいて来る大男。すると、周囲の空間が陽炎のように歪み、その姿が変化した。

その場に居た全員が警戒する。その中で、メラが声を上げた。

「あいつ。前に戦つた集団の中に居た…つまり敵だよ！」

「待て！」

晴人は今にも飛び掛かろうとするメラを晴人が手で制す。

「ウイザード…？」

「この世界にもファントムは居るのか。ゴメン。俺、君たちを誤解してたみたいだ…」

そう言つて指輪をベルトに翳す。

『ドライブーオン、プリーズ』

ベルトが出現するのすぐさまハンドオーサーを左側に傾ける。

『シャバドウビタツチヘーンシーン！ シャバドウビタツチヘーンシーン！……』

ベルトから例によつて軽快な待機音声コールが流れる。

晴人は左手に「フレイムウェイザードリング」を嵌めてハンドオーサーに翳した。

『フレイム！ プリーズ』

『ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！』

フレイムスタイルに変身した晴人は、ゆっくりと左手を顔の横に翳した。

「さあ、ショータイムだ！」

駆け出すウェザード。同時に、ファンтом・グリズリーもウェザードに向かつて駆け

出した。

手元に取り寄せたウイザードガンで攻撃するウイザード。一方で、グリズリーはその長く鋭い爪で攻撃していた。流れる様なアクロバティクな動きに翻弄されながらも、グリズリーは攻撃を仕掛ける。

一方のウイザードも、自身の攻撃がグリズリーの爪で防がれていることに若干の苛立ちを感じていた。

その時、グリズリーの爪がウイザードの胴体を捉える。

激しい火花を撒き散らしながら吹き飛ばされるウイザード。グリズリー畳み掛けるよう追撃する。

「ぐ…」

次第に防戦一方になるウイザード。マスクで表情は窺えないが、恐らく焦りの表情を浮かべているはずだ。

「ぐああああ！」

再び攻撃を受けて吹き飛ぶウイザード。

グリズリーはニヤリと笑うと、ウイザードに語りかけた。

「何だ？ もう終りか指輪の魔法使い」

「もう終り？ んな訳ないでしょ」

ウイザードはそう言いつつ左手の指輪を黄色い魔宝石から削り出された指輪に換える。

そして、再び左側に傾けたハンドオーサーに翳した。

『ランド！ プリーズ』

左手を足元に翳す。そこから土を纏う黄色の魔方陣が出現し、ゆっくりと上昇していく。

『ドツドツドツドツドン、ドンドツドツドン！』

完全に通過した後には、**ウェイザード**の姿を変化させていた。
ランドスタイル。ベゼルランドの形状は力強さを感じさせる四角形だ。

「仕切り直しと行こうぜ！」

「そうこなくては…楽しくなつてきたぞ！」

「アンタ戦闘狂かよ」

そう言いながら右手に持つウェイザードガンを振りかぶり、**ウェイザード**はグリズリーに向かっていった。

グリズリーの爪の一撃を左手で受け止め、右手のウェイザードガンで切りつける。
 火花を散らしつつ後退するグリズリーに、追撃の蹴りを放つウェイザード。その攻撃には一切の手加減は無かつた。

「く…なかなかやるなウェイザード。そうでなければ面白くない」

「そういう戦闘狂発言は止めてくれ。フェニックス思い出して鳥肌立つんだよ」

「関係ないな！」

瞬間、グリズリーの両目が光を放ちその体をさらに巨大にさせた。ゆうに三メートルはある。

「おいおいおい、そんな事も出来んのかよ！」

驚きの声を上げるウィザード。だが、巨大になった反面、敏捷性は落ちるようで、その動きにはキレが無い。

「団体ばかりでかくて動きはノロマか…。でかけりや良いってものでも無いでしょ」

そう言つて左手の指輪を素早く交換する。行使したのは緑の指輪。ベルトに翳した後頭上に翳す。

『ハリケーン！ プリーズ』

『フー、フー、フーフーフー！』

出現した風を纏う緑の魔方陣を通過し、ウイザードの姿が再び変化した。

風のエレメントをその身に宿すウイザードの敏捷形態^{ハリケーンスタイル}。緑色に煌めくベゼルハリケーンの形状は逆三角形だ。

手に持つウイザードガンを逆手に持ち替え、身体に風を纏わせて空を飛ぶ。それは正に魔法使いと呼ぶに相応しい姿だつた。

高速で飛行しながら連続攻撃を決めるウイザードに、グリズリーは為す術が無かつた。

斬つては離れ、斬つては離れるヒットアンドアウェイを繰り返すウイザード。グリズリーはもうボロボロだつた。

止めを刺すべく、ウイザードはウイザードガンのハンドオーサーを起動する。必殺技発動の待機音声が流れ、ウイザードが左手を翳そうとしたその瞬間、メラの叫び声が木霊した。

「ちょっと待つてよう！」

「んあ？」

「こいつ、前の戦闘で私が相手をしてたんだよう。だから、後は譲つてももらえないかなあ

? 決着、着けたいんだ』

「判つた。そういう事なら後の事はメラに任せる」

ウイザードはそう言うと左手の指輪を換えた。

『フレイム！ ドラゴン！』

『ボー、ボー、ボーボー！』

一瞬のうちにフレイムドラゴンに変化する。^{チエンジ}

そして、右手に紫色の魔宝石から削り出された指輪を嵌めた。

この指輪は、ファントム・オーガを倒した後、笛木の家を調べていた木崎警視から受け取つた、言わば笛木の形見の指輪だった。

ハンドオーサーを右側に傾ける。

『ルパッチ・マジック・タツチ・ゴー！ ルパッチ・マジック・タツチ・ゴー！……』

待機状態を意味する音声コールが鳴り響く。

一瞬の躊躇いの後、ウイザードは指輪をハンドオーサーに翳した。

『エクスプロージョン、プリーズ』

音声コールと共に右手を前に突き出す。すると、グリズリーの周囲に激しい爆発が起つた。

まともに喰らい吹き飛ばされるグリズリー。転がつていった先には、メラが立っていた。

「ありがとウイザード♪ 後でチューしてあげる♪」

「それは勘弁して欲しいね。ま、気持ちだけ受け取つておくよ」

ウイザードはいざというときの為に変身は解除せずにラン達の待機している場所に向かう。

「良いのか？」

「ああ。残念だが、俺のショーはここまでだ。ここからは…メラのショータイムだ」

そこからはメラの一方的なお仕置きだった。

ウイザードの攻撃によつて既に弱つていた事を差し引いても、メラは強かつた。グリズリーの巨大な体は、強大なパワーがまつたく機能せず、ただの的でしかなくなつていた。

メラは全身に炎を纏い、グリズリーを攻撃する。

流石に危険を感じたグリズリーは、逃走を計ろうとした。

「逃げるの？　じゃあ、止め！」

メラは両手を頭上に翳す。そこから巨大な灼熱の球体が出現した。

「ひ…ひいいい！　助け…」
「喰らえ、『灼熱メテオフの隕石』！」

メラの怒りの一撃を受けたグリズリーは、断末魔の叫びと共に消滅した。

「終わったか？」

「ふい！」

一息ついて変身を解除するウイザード。そこにメラが近づいて来た。

「任せてくれてありがとう♪」

そう言つて晴人の頬にキスするメラ。

「……え？」

「おうおう、お熱い事ですなあウイザード」

ダクが茶化す。見ると、全員がニヤニヤしていた。

だが、忘れてはいけない。メラが幼女体型だということを…。生憎、晴人にそんな趣味は無かつた。

戦闘が終了し、一同は改めて再会を喜んだ。
しばらくしてから、ランが口を開く。

「じゃあ、隠れ家に行くか」

「そうだね。こんな所に長居は無用だ」

ランの提案にラドが賛成する。その中で晴人が手を上げた。

「あの〜俺は行つても良いのかな?」

「もちろん、歓迎するで〜！　もうウチら仲間やん！」

「…歓迎…」

おずおずと聞いた晴人に、満面の笑みで答えるサン。アクアも無表情だが歓迎してくれるようだ。

一同は足並みを揃えて隠れ家に向かった。

隠れ家は街から少し離れた郊外にあった。

晴人が想像していた廃墟とは違い、レンガ造りのちゃんとした家だった。

「へえ〜。意外と普通の家なんだな」

「偏見だぞソレ。廃墟とかだつたらいかにもですぐにバレるだろ?」

「そういうもんかね」

「ハルト、ここが我輩達の隠れ家『アルカンシエル』だ」

「へえ、ネーミングぴつたりじゃん」

「さあ、入つた入つた!」

ランに急かされ、晴人は隠れ家の中に入つた。

隠れ家の中は案外普通の構造になつており、パツと見では隠れ家には思えなかつた。

「ここは普通の生活を送るスペースだ。ホントの隠れ家は地下だよ」

そう言つて床を指差すラン。晴人は大体予想していたのであまり驚かなかつた。

しばらくリビングの様な少し広いスペースで寬いでいると、玄関の扉が開き誰かが入つて来る。

気配は段々とリビングに近づいて來た。

リビングの扉を開き一人の少女が入つてくる。

その少女は、最初晴人の姿に驚いていたが、やがて笑顔を見せて口を開いた。

「ただいま。お客様來てるんだね、こんにちは♪」

「おかえり。さつき私達を助けてくれたハルトだつて：どうしたハルト？」

晴人は帰つてきた少女を見て固まつている。それは、あまりにも知り合いにそつくりだつたからだ。

いや、そつくりという言葉は語弊がある。まさに生き写しだつたのだ。

「…コヨ…ミ…？」

グレムリンの攻撃によつて消滅した筈の人物。

自分が魔法使いとなるキッカケを作り、自分に魔法使いになる事を薦めた人物の娘。
コヨミだつた。

(続
く
…)

第三話

暗闇の中に佇む一人の女性、ファントム・リヴァイアサン。

セミロングの青い髪。深海の様に深く美しい青い瞳。美しくも鋭い顔立ち。
どこか儂げなその視線は、暗闇の中心を見据えている。

髪の色と同じ青のドレスを着ているリヴァイアサンは、その口をゆつくりと開いた。

「計画通り、グリズリーは指輪の魔法使いに倒されました。次はどうされますか？」

「そうか…では次から本格的に殲滅する。グリズリーの戦闘でウイザードのデータは完全に揃つた。ウイザードを消すことなど容易い」

「おっしゃる通りですオロチ様。すぐに次の刺客を送ります」

「理想の為に：頼むぞリヴァイアサン」

「仰せのままに、オロチ様」

リヴァイアサンは声が発せられている暗闇に向かつて一礼し、踵を返した。

幕で遮断された部屋から出たリヴァイアサンは、廊下を歩き、日の光が差し込む礼拝

堂の様な部屋に入る。

その部屋には先客が居た。灰色のロングコートを羽織つた茶髪の男だ。

「あら、来てたの？」

「リヴィアイアサンか：相変わらずオロチにベツタリか？」

「様」を着けろバジリスク！ オロチ様を愚弄する氣か！？』

リヴィアイアサンが怒鳴る。バジリスクと呼ばれた男は、それを鼻で笑うと立ち上がつた。

「別に愚弄しちゃいないさ。オロチだって無理に様を着ける必要はないって言つてるし、好きに呼ばせてもらうぜ」

「貴様！」

「熱くなるなよ。お前の取り柄は冷静さだろ？」

「くつ…」

自分のペースを乱されたりヴィアイアサンは歯噛みする。この男にはいつもペースを

乱される為、リヴァイアサンは好きではなかつた。

「お前、グリズリーを捨て石にしたらしいじやねーか」

「勘違いするな。奴が任務に失敗しただけの事だ」

「指輪の魔法使いか？ そもそも、次元の扉を出現させたのはナイトメアだろ？ 奴はどこだ？ お前の部下じゃねーか」

「さあ。私にも奴がどこに居るのかは知らない」

リヴァイアサンは首を横に振る。

「ところで、貴方は今まで何をしてたの？」

「ちよーとな。俺は俺で計画があるのさ」

バジリスクの言葉にリヴァイアサンはあからさまに顔をしかめた。

「オロチ様の計画に従わないと？」

「そうは言つてねえ。だが、今回は俺も独自に動かせてもらうだけだ。オロチ”

様”の

理想を叶える為にな』

バジリスクはそう言つてその場から立ち去る。残されたリヴィアイアサンは、しばらくバジリスクの後ろ姿眺めていた。

一方、隠れ家【アルカンシエル】では、コヨミの登場で晴人が呆然としていた。

「コヨミ…何で？」

「え？ あなた、私を知ってるの？」

可愛らしく小首を傾げるコヨミ。仕草、表情、声色、性格…全てが晴人の知るコヨミだつた。

今はもう会うことが出来ない懐かしの人物と同じ姿の少女の登場に、晴人は混乱した。

頭では別人だと解つても、目から入つてくる情報がそれを受け入れない。

「なあハルト。お前コヨミを知つてんのか？」

「……まあね。正確には、俺が居た世界の知り合いに生き写しなんだよ」「へえ、珍しい事もあつたもんだな」

「ここは俺にとつて異世界だ。別に不思議じやないさ……それより、詳しい話を聞かせてくれ」

無理矢理納得させた晴人は、ランに説明を促す。

「そうだな。実は——」

ランは前置きしてから話始めた。

時は遡り一年前、平和そのものだった【ヴィガルニア】に突如として邪悪な闇が舞い降りた。

自らを【オロチ】と呼称するその闇は、【ヴィガルニア】の人々を混乱と恐怖のドン底に陥れた。

僅か一日で【ヴィガルニア】最大の王国を蹂躪したオロチは、何人かの国民を捕らえて姿を消した。

その後、連れ去られた人々を見た者は一人も居ない。

しばらく後にとある山奥で、赤い光といくつかの小さな紫の光を見た者が数人居た。その目撃者の話では、その小さな紫色の光の数は、連れ去られて行方不明になつた国民の人数と同じだつたという。

その更に数日後、連れ去られた一人の男性が王国の村に帰つて來た。

彼の名はハデルヤ。しがない鍛冶屋の息子だつた。

彼の両親は大変喜んだ。

「無事だつたんだなハデルヤ！」

「心配したのよ！ 一体何があつたの!?」

涙を流しながら語りかける両親。その中心にある息子の邪悪な笑みに気づかずには。「とにかく無事で良かった」

「無事？ 笑わせんなよ人間風情が…。ハデルヤは絶望して死んだ。俺というファンタムを産み出してなあ！」

そう叫ぶと同時に姿を変える。その姿は、怪物そのものだつた。

「俺はフェンリル。貴様らを葬るファントムの名だ、覚えておけ!!」

その後、その村で村人を見た者は居ない。

その村を訪れた者は語る。【絶望の村】だつた、と。

「……【絶望の村】、か…」

ランの話が終わると、晴人は呟いた。

「【絶望の村】はこの近くにあるのさ…」

「へえ、この近くにあるんだ」

「そして夜な夜な、村人達の苦しそうな呻き声が…」

そこまで言うと部屋の明かりが突然消える。そして晴人の耳元で…。

「うううううああああ……」

低い呻き声が響いた。

「うわあああああ!?」

悲鳴を上げる晴人。そこで部屋の明かりが点いた。

晴人が辺りを見渡すと、ニヤニヤと笑っているランや他の人々。サンに至つては、床を拳で叩いて爆笑している。

「お前ら……」

晴人のこめかみに青筋が浮かぶ。

「怪談話は夜にやるものだぜ」

晴人はそう言って右手に指輪を嵌める。黒色の魔宝石から削り出された指輪だ。

ベルトのバツクル状態のハンドオーサーに翳した。

『ホラー、プリーズ』

正面に出現した黒い魔方陣から、靄と共に数々の悪霊や怨霊の幻影が現れた。パニックになる一同。晴人はそれを見てイタズラっ子の様にニヤリと笑つた。

「おかえしだ。これがホントの心霊体験つてね♪」

「冗談きついよハルトお～！」

メラが両目に涙を溜めて口を尖らせる。ヒュウカ達女性陣も涙目だ。

「貴様の魔法は洒落にならん！」

「アレって、君の居た世界の幽霊たちでしょ？　けつこう怖いじやん…」

「…同意…」

「ホンマ心臓止まるかと思たで！　冗談も大概にせえや！」

「悪い悪い。ちょっとやつてみたくなつてね」

イタズラっぽく微笑む晴人。

使用した指輪は【ホラーウィザードリング】。黒い魔宝石から削り出された指輪で、使用すると魔力量に応じた数の幽霊が出現する効果がある。戦闘向けではない指輪だ。しばらくして落ち着きを取り戻した一同は、各自自分のやるべき事をし始めた。

「え？ メラが料理するのか!?」

「ぶううう！ 失礼だぞう！ こう見えても、私けつこう上手なんだからね！」

「まあ、私も一緒に作るから大丈夫ですよハルトさん♪」

「そつか、それなら安心だ」

「うえええええん！」

それからしばらく隠れ家【アルカンシエル】には、メラの泣き声が響いていた。

数分後、妙に張り切ったメラと、そんなメラに若干引いているヒュウカは料理を作つていた。

「むく。目にもの見せてやるんだからあ！」

妙に気合いが入っているメラ。どうやら晴人に言われた言葉がよほどショックだったようだ。

「どーしょアレ。ちよつとからかい過ぎたかな?」

「気にせんでええよ。いつもの事やから」

ちよつとやり過ぎたと後悔している晴人に、サンが優しく語りかける。

「あの娘のポジションは弄られキヤラやねん。それに、メラはハルトが気に入つてんね
んで?」

「え?」

「あん時も「ウイザードと遊べる!」言うて、ダクの制止も聞かんと会いに行つてしま
て…ダク宥めんの大変やつてんで?」

「なるほど。これは謝るべき…なのか?」

「別に謝らんでもええよ。ハルトの所為や無いからな」

「仲…良いんだな」

「ハルトは居らんの？ 元の世界で帰りを待つてゐる人は…」

サンの言葉で晴人の脳裏に【面影堂】の面々が過る。
凛子、瞬平、輪島のおっちゃん…。そして、いつしかライバルであり戦友でもある仁
藤。

「今頃心配してゐるかな…みんな」

「帰りたくなつた？」

「いや。まだ帰る訳にはいかないよ。ファンタムを倒すまでは…ね」

「ふうん。頼りにしてるで、魔法使いさん♪」

「任せて。俺が最後の希望だ」

「頼もしなう」

「もし…」

「え？」

「もし、絶望しそうになつたら…俺が希望になつてやるよ」

笑顔で右手に嵌められた指輪を前に翳し、そう宣言する晴人を見て、サンは顔を赤ら

めた。

その様子を影から見ていたラドとダクは…。

「ねえダク：ハルトって女たらしなのかな？」

「かもな。しかも天然女たらしひときたもんだ。羨ましい～」

「ダク：キヤラが壊れるよ…」

そんなやり取りをしている二人だつた。

そうこうしている間に、無事に料理が完成したようだ。

メラとヒュウカの二人が次々と食卓に料理を運ぶ。

晴人とサンも手伝い、瞬く間に食卓は料理で埋め尽くされた。

「多いな。短時間でこれだけの量を作れるとは…相変わらず流石だな二人とも」

ダクが二人を労う。全員が食卓に揃った時点で、夕食が開始された。

まず晴人は、卓上の中間に置かれている大皿に手を伸ばす。そこには、唐揚げが置かれていた。

「ドーナツも美味いけど…こつちも中々だね」

「せやろ!? メラが作る唐揚げは美味しいんや!」

「そんな誉めても何も出ないよう!」

食卓を笑いが包んだ。

晴人はコヨミが普通に食事しているのに驚いた。

やはりここは世界が違うのだと改めて実感する。例え世界が変わつても、この笑顔は守り抜こう、晴人そう心に誓った。

しばらくして食事を終えた一同は、少し話をしたあと就寝した。

「ベッドはこれを使つてくれ。何かあつたら私に言つてくれよ」

「ありがと。じゃ、おやすみラン」

晴人は短く返事をして横になる。今日は色々な事があつて疲れたようだ。
横になつてしまふと、晴人は静かな寝息をたて始めた。

どれくらい寝ていただろうか。晴人は誰かに名前を呼ばれてふと目を覚ました。

「…………ここは？」

晴人は自分が居る場所に驚く。そこは【アルカンシエル】のベッドの上では無く、辺り一面のお花畠だつた。

「…………何で？」

咳く晴人。その疑問も当然と言える。

起き上がつた晴人は辺りを見渡す。しかし、人っ子一人居ない。

『晴人……』

「?」

その時、晴人は自身を呼ぶ声を聞く。その声は、晴人がよく知る人物の声だった。

「コヨミか！　どこに居る！」

『聞いて晴人。今、【ヴィガルニア】は危機に瀕している』
『知ってるよ。ファンタムだろ？』

『ただのファンタムじゃないわ』

『どういう意味？　ただのファンタムじゃないって…』

『最強最悪のファンタムよ。名前は【オロチ】』

「オロチ……」

『気をつけて晴人。それから、【ヴィガルニア】を救つて。貴方は最後の希望よ』
「わかったよコヨミ。俺が必ず救う。だから安心して眠つてて』

その言葉に安堵するかのように、コヨミの声は気配を消した。
同時に晴人は強烈な眠気によつて、再び眠りに落ちた。

「アルカンシェル」のベッドの上で晴人は目を覚ました。

あれは夢だったのだろうか……。目を閉じると鮮明に脳裏に浮かぶ先ほどの光景。出てきたコヨミは、晴人がよく知るコヨミだった。

おそらく現実と夢が融合したものだったのだろう、そう結論付けた晴人は、コヨミの言葉を思い出す。

「最強最悪のファンタム」……コヨミは確かにそう言つた。

「……オロチ……か…」

晴人の呟きは闇に消えていった。

朝。柔らかな日射しに照られ、晴人は再び目を覚ました。

「ふあああ～～ああ……」

大きな欠伸をひとつつくり、ベッドから起き上がる。リビングに向かうと、既に全員が揃っていた。

「あ、お寝坊な魔法使いさんが起きて來たで～」

「遅いよ晴人お～！」

「悪い悪い。おかげで良く眠れたよ」

晴人は苦笑いしながら頭を搔く。

「晴人、貴様はこれからどうするのだ？」

「俺？　俺は…その辺をぶらぶらするかな。この世界を見て回りたいからさ」

「香気なものだな」

「その香気さが俺の取り柄さ。夜には戻るよ」

晴人はそう言うと、笑みを浮かべて「アルカンシエル」から外に出ていった。

マシンワインガーに跨がり、アクセルを噴かす。

「さあて、行きますか」

晴人はヘルメットを被るとバイクを走らせる。

10分くらいだろうか、ちょっとした広場に到着し、晴人はバイクから降りる。周りには暖かな日射しの下、多くの人々で賑わっていた。

「こうやつて見ると、ファンタムの影響なんか感じられないな……」

晴人は近くの噴水の淵に腰掛け、外出の際ランから渡されたドーナツを頬張った。

「もし、そこのお若い方…」

「ん？　俺の事？」

ふと顔をあげると、にこやかに微笑む初老の紳士が晴人を見ていた。

「貴方、指輪の魔法使いさんですか？」

「そういうアンタは、ファンタムさん…だよね？」

「御名答。お初にお目に掛かります。わたくし 私、ファンタム・ヤタガラスと申します。以後、お見知り置きを……と言つても、貴方はここで死ぬのですが…」

初老の紳士はファンタム本来の姿に戻ると、周囲に灰色の石をばらまいた。

それは徐々に形を成していき、ついに二つの角を持つ【グール】と呼ばれるファンタムの僕に変化する。

「随分と大人数だな」

「パーティは多い方が楽しめるのでね」

「…なるほど。ファンタムにしては良いこと言うじゃん」

！」

「おつと！ はは…せつかちさんは嫌われるぜ？」

ヤタガラスの攻撃を躊躇した晴人は、ベルトを指輪をベルトに繫す。

『ドライバー オン、プリーズ』

『シャバドウビタツチヘーンシーン！ シャバドウビタツチヘーンシーン！…』
『ランド！ プリーズ』

「変身！」

『ドツドツドツドドン、ドンドツドツドン！』

出現した黄色い魔方陣を潜った晴人は、剛力形態(ランドスタイル)に変身していた。

「さあ、ショータイムだ！」

「料金は払いませんよ！」

「それならツケにしといてやるよ！」

ウイザードはそう言つてウイザードガンを取り出す。
そしてヤタガラスを切る、斬る、切り裂く。

ヤタガラスは火花を撒き散らしながら転げ回った。

「く：流石にお強い！ ですが！」

次の瞬間、ヤタガラスの両目が鈍く輝き、黒い光弾を飛ばす。

「おつと！」

躰すウイザード。だが、その隙にヤタガラスはその場から姿を消した。

「どこ行つた！」

「上ですよ！」

突如真上からヤタガラスの声が響く。見上げると、まさにヤタガラスが攻撃を仕掛け

る瞬間だつた。

咲嗟の事で反応出来なかつたウイザードは、ヤタガラスの攻撃をまともに喰らう。

「アンタ、空も飛べるのか！」

「カラスが飛べるのは当然ですよ」

小馬鹿にしたように笑うヤタガラス。

「そうか。だが、飛べるのはお前だけじゃないさ！」

『ハリケーン！ ドラゴン！』

『ビュー、ビュー、ビュービュービュー！』

緑色の魔方陣と共に風のエレメントを纏つたドラゴンの幻影が出現し、ウイザードと一体化する。

絶大な風の魔力が、ドラゴンの咆哮と共にウイザードの姿を変えた。

頭部のアルターベゼルハリケーンは通常スタイルと同様に逆三角形。両肩には逆三角形の封印石が追加されている。

胸部には、ウイザードラゴンの顔を模した装甲が施されている。

その身に宿すエレメントと同じ、緑一色のウイザードローブ。周囲に荒れ狂う風を従えた敏捷形態（ハリケーンスタイル）の強化形態・風を司る魔法使いがその姿を現した。

ウイザードはウイザードガノン・ソードモードのハンドオーサーを起動させ、右手の指輪を翳した。

『コピー、プリーズ』

魔方陣と共にウイザードの左手にウイザードガノンがもう一振り現れる。

「お前に構つてる時間は無くてね。悪いが一気に決めさせてもらう！」

そう言うと、ウイザードは再びウイザードガノンのハンドオーサーを起動し、指輪を翳した。

『ハリケーン！ スラッシュストライク！』

『ビュ－、ビュ－、ビュ－！ ビュ－、ビュ－、ビュ－！……』

音声コールと同時に一振りあるウイザーソードガンの刀身が風を纏う。

「はあっ！」

短い気合いと共に振られたウイザーソードガンから風のエレメントを纏う斬撃が放たれる。

その斬撃は寸分の違ひもなくヤタガラスを直撃した。

だが、ヤタガラスは吹き飛ばされた程度でまだ倒されてはいない。
ウイザードは再び左手の指輪を変えた。

『ランド！ ドラゴン！』

『ダン、デン、ドン、ズドゴーン！ ダン、デン、ドゴーン！』

黄色い魔方陣と共に土のエレメントを纏つたドラゴンの幻影が現れる。
咆哮を上げながらウイザードと一体化すると、ウイザードの姿がまた変わった。
力強さを感じさせる四角形のアルターベゼルランド。両肩には四角形の封印石が備

わり、胸部にはウイザードラゴンの顔を模した装甲が施されている。

黄色のウイザードローブはその身に宿すエレメントを十分に表現している。
大地を司る魔法使い……ウイザードの剛力形態を強化した姿である。
ゆつくりと構えを取るウイザード。

その視線はヤタガラスをしっかりと捉えていた。

「やれやれ。その姿で空を飛べる私とやり合うつもりですか？」
「いくらでも手はあるんでね！」

『チョーイイネ！ グラヴィティ、サイコー！』

ベルトに翳した指輪に込められた魔法が発動する。重力を操るその魔法は、ヤタガラスの動きを完全に封じた。

「フィナーレだ！」

『チョーイイネ！ キックストライク、サイコー！』

右足の下に魔方陣が現れ、土のエレメントを纏う。

「やられる訳にはいきません！」

瞬間、ヤタガラスはその身を翻して姿を消した。

「くつ……逃がしたか」

変身を解除する晴人。気付けば、周りにはかなりの人だかりが出来ていた。

人里離れた山の中にひつそりと聳える廃墟と化した古城。そんな古城の中に、ヤタガラス（人間形態）が静かに座っていた。

「随分と勝手な真似をしてくれたみたいね……ヤタガラス！」

「ほう。リヴァイアサンですか……これは珍しいお客様ですね」

「貴様……何故オロチ様の作戦に従わない!?」

「お言葉ですが、私はバジリスク様の指示に従つただけです。オロチ殿に逆らうつもりは毛頭ありませんが、従つつもりもまたありません」

「貴様っ！」

リヴィア・アイアサンは怒りを露にする。彼女にとつて、ヤタガラスはバジリスクと同様に嫌な相手だった。

「まあまあ、方法は違えど我等の最終目的は同じ。少しほは信用して欲しいものです」

「……ふん、まあ良い。それで？ ウィザードはどうなつてるの？」

「ええ、今の彼なら…倒すのも容易いかと」

「そ。じゃあそつちは任せるわ」

リヴィア・アイアサンは踵を返すと再び闇の中に消えていった。

(続く…)